

感動一点の場

『風倒木』

1955年 小川原 脩 画
(武内コレクション)

「折れ倒れ裂けて 私は地に伏し 地衣類は繁殖し 木喰い虫ははいまわる 白けきった肌をさらして 憎しみの想念が 杖のごとく横ぎる 去りし年九月のぐ風*よ」

この散文は、1954年9月に発生した台風15号の風倒木被害を取材した小川原脩が、その胸中を色紙にしたためたものです。一見何をどう描いている絵なのか、想像もつかない作品ですが、この画家の言葉を添えてみると、なるほど円盤のようなものは土塊ごとなぎ倒された大木の根であり、引き千切られるように折れた幹なのです。白茶けたその枝には、もう生命力は感じられません。強烈な暴風による青函連絡船の遭難転覆事故から名付けられた「洞爺丸台風」は、岩内大火をも引き起こし、また北海道の広大な山林にも甚大な被害をもたらしました。翌年、小川原は営林署からこの風倒木被害を記録する要請を受け、層雲峡や網走管内置戸町などに赴きます。トドマツ、エゾマツといった針葉樹が根こそぎ倒れ、広大な森は痛々しい姿を見せていました。自然の脅威をまざまざと見せつける光景に胸中は穏やかではなかったはずですが、その手を動かし自分の仕事をし続けた小川原は、生粋の画家であったのでしょう。



*ぐ風…強烈な風、熱帯低気圧の旧称

文：沼田 絵美 (小川原脩記念美術館 学芸員)

ふるさと探訪

—ハクチョウの渡り—

445回

冬から春先にかけて、空を舞う大きな白い影。そう、冬の鳥ハクチョウです。日本で冬越しするハクチョウは、主にオオハクチョウとコハクチョウの2種類。しかし、オオハクチョウは太平洋側、コハクチョウは日本海側、と好みの越冬地が異なっているため、日本海側にあたる倶知安町の周辺ではコハクチョウに出会う機会が多いです。彼らがやってくるのは遠く離れたユーラシア大陸北部のツンドラ地帯です。北海道に来る理由は、ツンドラ地帯の厳しい寒さを避けて冬を越すため。川の流れの緩い場所や、畑や田んぼの地面の出ている場所でエサを取りながら、来たる北への旅支度をします。彼らが旅に出るのは3月から5月上旬にかけてで、ロシアのサハリンやアムールを経由してオホーツク海を越え…。さらに北にある繁殖地を目指します。閉じこもりがちな時勢ですが、空からはハクチョウたちの鳴き声が聞こえてくるかもしれません。散歩などをしながら、見送ってみてはいかがでしょうか。ちなみに、エサを与えるのは彼らの野性を奪うことにもつながりますので、お控えくださいね。



田んぼに降り立ち、エサをとるコハクチョウとマガンの群れ(宇富士見にて)

文：小田桐 亮 (倶知安風土館 学芸員)

展覧会のお知らせ

■第1展示室

小川原脩展「遙かなる道程～70年の歩み」

小川原脩は1911年に倶知安で生まれ、2002年に91歳で生涯を終えるまで、その人生の大半を郷里での創作に費やしました。旧制中学に通う14歳のときに油絵の具と出会い、19歳で東京美術学校西洋画科へ進学し本格的に画業を開始、以来70数年にわたり絵描きとしての道を歩んできました。



本展では美校時代の秀作、シュルレアリスムに傾倒した作品、戦後北海道の風土を捉えようとした試み、自らの境遇を託した動物たち、そして自然と人間が交歓するアジアの大地など、それぞれの時代に小川原が向き合った代表作を集め、明治から平成まで日本の激動の時代を生き、常に新たな芸術潮流を感じ取りつつも自らの創作姿勢を貫いた70年の歩みをたどります

会期：開催中～8月16日(日)

■第2展示室

武内コレクションによる北海道の美術

倶知安を代表する経済人で多くの後進を育て、また当館設立に力を注ぎ初代美術館友の会会長を務めた武内一男氏(1925-2007)から寄贈を受けた「武内コレクション」には、北海道を代表する作家が多く含まれ、北海道の美術史を一望することができます。



大正期から昭和初期に至る北海道美術界が高揚した時期に始まり、戦前戦後の公募展や道内外で活躍した作家まで、そうそうたる顔ぶれの作品をどうぞお楽しみください。

会期：開催中～7月12日(日)

展覧会スケジュール (2020.4～2021.3)

■第1展示室

4月1日(木)～8月16日(日)	小川原脩展「遙かなる道程～70年の歩み」
8月22日(土)～11月15日(日)	小川原脩展「アジアへのまなざし」
11月21日(土)～2月7日(日)	第62回麓彩会展
2月13日(土)～4月18日(日)	本庄隆志展

■第2展示室

4月18日(土)～7月12日(日)	武内コレクションによる北海道の美術
7月18日(土)～9月27日(日)	しりべしミュージアムロード共同展「五館五色!色とりどり」
10月3日(土)～1月11日(月・祝)	小川原脩展「世界へ向かう：シュルレアリスムと美術」
1月16日(土)～4月18日(日)	小川原脩展「《森の入り口の白い樹》と北の動物たち」

※展覧会の日程は変更になる場合があります

ミュージアム 通信

小川原脩記念美術館 ☎21-4141

観覧料：一般 500円(400円)
高校生 300円(200円)
小中学生 100円(50円)

倶知安風土館 ☎22-6631

観覧料：一般 200円(100円)
高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時
入館は16時30分まで
※()内は10名以上の団体料金
5月の休館日 毎週火曜日、6日(祝)まで(新型コロナウイルス感染拡大防止のため)

春山に想う

3月下旬に山へ向かい、下山するのは5月上旬。その間、山スキーを履いてヒグマの痕跡を日がな一日追い求め、時には崖の上から冬眠穴あたりの定点観察をする、そんな日々を送っていた時期がありました。

今から40年以上も前、サークル活動でヒグマの生態調査をしていた頃の話です。新学期の授業が始まってもお構いなし、のんびりした時代でした。今思えば、その後の世界観まで左右するような得がたい経験だったような気がします。

美術館の窓から倶知安の春山を眺めていると、そんな当時の記憶が時折りよみがえってくるのです。

館長 柴 勤